A 型肝炎の Diffuse Outbreak に関する更新情報-3

平成 22 年 6 月 9 日

厚生労働省医薬食品局監視安全課
厚生労働省健康局結核感染症課

国立感染症研究所実地疫学専門家養成コース（FETP）
国立感染症研究所感染症情報センター

A 型肝炎の報告数は 2010 年第 10 週以降過去 2 年間の報告数と比べ多く推移している（図 1. ピークは第 13 週の 26 例）。報告数は減少傾向にあるものの、依然、週あたり 10 例前後の報告が継続している。

図 1. 診断週別の A 型肝炎流行曲線(2008 年～2010 年第 21 週 n=505)

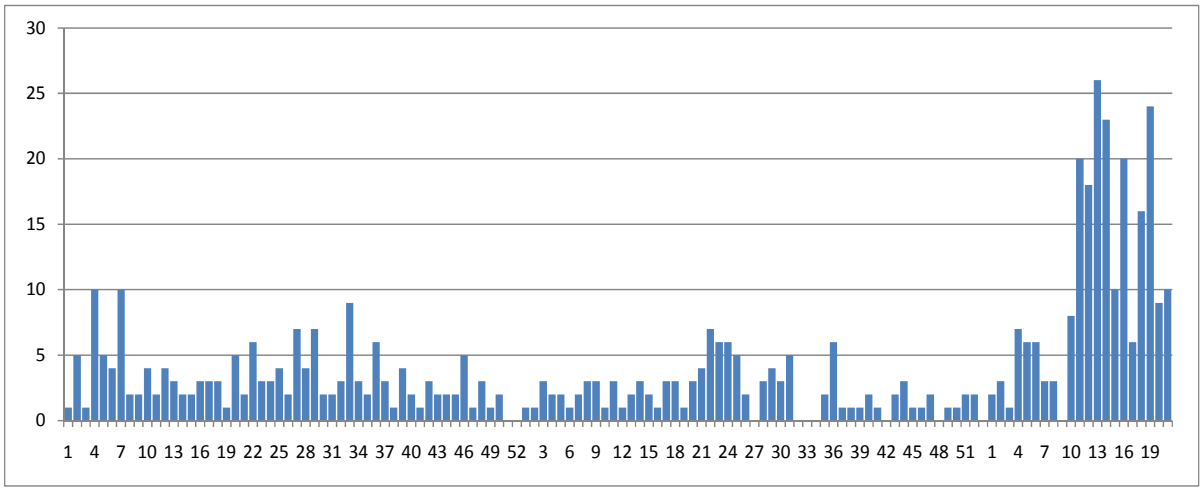
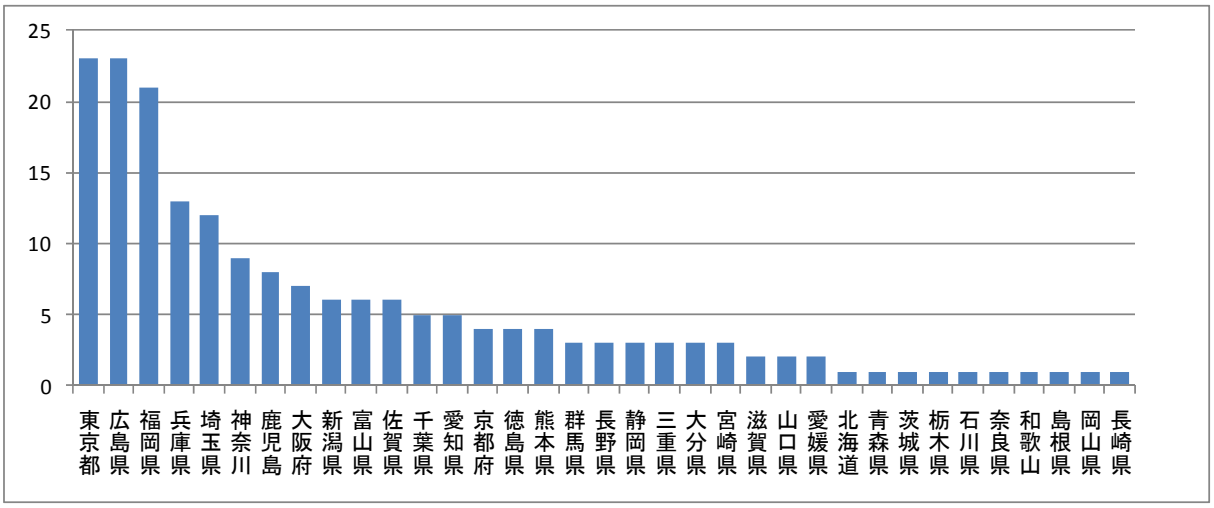


図 2. A 型肝炎報告例の住所地別報告数(2010 年第 10 週～第 21 週の診断例 n=190)



2010 年第 10～21 週に報告された 190 例の住所地は、東京都 23 例、広島県 23 例、福岡県 21 例、兵庫県 13 例、埼玉県 12 例、神奈川県 9 例、鹿児島県 8 例、大阪府 7 例の順となっている（図 2）。年齢の中央値は 49 歳（範囲：6－88 歳）、性差はない。症例のうち 5 例に劇症肝炎の報告があった（うち 1 人は死亡）。ほとんどの症例において診断には血清 IgM 抗体検査が行われ、PCR 法によるウイルス検出は第 21 週の集計時までに 7 例（3.5%）しか報告されていない（表 1）。しかし、4 月 26 日付けで、健康局健康部結核感染症課長並びに医薬食品局食品安全部監視安全課長連名による通知が出されたことをうけ、複数の自治体において検体確保の動きがみられ、地方衛生研究所及び国立感染症研究所において検査が実施されるようになった。国立感染症研究所ウイルス第二部第五室で把握されている検査実施件数は 6 月 7 日までに 14 自治体から 35 件であり、検査結果も得られているが、まだ公表の段階に至っていない。この検査結果を全国の自治体に還元し共有を図り、対策に活用する必要があると思われる。集団感染発生時には、現在実施している検体確保から遺伝子学的検査までの体制が速やかに開始され、その結果が対策に利用されることが重要と考える。

表 1. A 型肝炎報告例の臨床像と感染経路（NESID 入力内容による）

（2010 年第 10 週～第 21 週の診断例 n=190）

年齢（中央値）	6－88歳（49歳）
性別	男性104（55%）、女性86（45%）
感染経路	経口感染161（85%）、その他（不明）31（15%）
経口感染の原因食材	カキ56（35%）、さしみ・貝類21（13%）、 その他・不明など84（52%）
劇症肝炎	5例（3%）〔50代3例、60代2例（うち1例死亡）〕 〔他に第8週に1例（40代）の報告あり〕
無症候	2例（1%）（30代、50代）
診断方法	血清IgM抗体のみ182（96%）、 PCR法によるウイルス検出のみ1（0.5%）、 血清IgM抗体およびPCR法によるウイルス検出6（3%）、 その他の方法1（0.5%）